平成 18 年度活動報告

平成 18 年度の主な活動を次の通り報告します。(最新情報から掲載しています。)

平成 18 年 9 月 2 日（土）午前中は定例会。午後は定期開館でした。この日、ついに吉岡まちかど博物館に電気設備工事が完了し、博物館らしくなりました。今までは吉岡家のご好意に甘えていましたが、今後は自前の電機となりました。
　また、午後、補修中の武蔵屋さんで新たに昔の看板、提灯の入れ物が見出されたので報告します。

待望の電機設備がつきました。右は一階にあるスイッチです。左は軒下左奥に設置されたコンセント。段々、博物館らしくなってきました。多目的に使える空間です。もっと多くの方に使用していただきたい空間です。重厚な蔵内での写真・絵画展はこの空間にぴったりです。

武蔵屋で見出された美しい看板。時期は不明であるが明治前期までは遡らない。武蔵屋は明治期には旅籠屋を、その後肥料、米を扱っていた。

左は武蔵屋の提灯入れの箱の側面に描かれた屋号。右は銭函。両方とも時期は不明。
　　それにしても、歴史のある家である。この家は中心市街地内で景観形成上、最も重要な町屋である。

平成 18 年 8 月 5 日（土）　気温 34 度の猛暑の中、塾生一同で課題であった排水菅敷設工事を行いました。土蔵は明治 24 年に建設された。このため、地盤面は大正初期に建てられた母屋より 50ｃｍ程度低いところにある。即ち、今の吉岡家の家は近世及び近代の地盤面が両方見られる場所なのである。明治 43 年（1910）8 月、利根川は未曾有の大洪水となった当時の新聞は<印西方面被害>の見出しで「印旛郡木下附近に於ける被害は流失家屋布鎌 2ーー浸水家屋木下 283、ーー大杜 30ーー浸水反別木下 400 町歩ーー」『千葉毎日新聞』（明治 43 年 8 月 23 日）と報じており、この土蔵も浸水した可能性がある。その後、洪水対策が強化された。荒川放水路もこの一環である。土蔵周辺は雨が降ると自然に水が溜まり、湿気が多い状態であり、保存上も好ましくない。このため今回の工事となった。。8 月 20 日午後再度、仕上げをやります。

今回の設計もＮ塾生が行なった。土蔵の南、西、北側から成田線の方へ向けて、排水菅を敷設する計画である。先ず、敷設溝を穿つことから開始した。概ね幅、深さとも 30ｃｍ。写真左は硬い地面を自宅の耕運機でチャレンジした伊藤会長。右は地盤が固く、また木々の根により手掘りが困難なところは、二見屋さんの機転で地元の水道工事屋さんのミニユンボで掘削した。掘ることがお手上げだった箇所も瞬く間に掘削できた。機械様様であった。

蓋し、暑かった。寄る年波には叶わず、少しやっては休みが多かった。（仕方がないね）。写真左はスコップ片手の塾生達。この日、女子塾生は利根川コスモス畑の草取りに行っていた。写真右は掘削した溝に敷石するため、ガラ（実はこれは武蔵屋玄関前にはられていたコンクリートを玄関再生工事ではがしたガラである）の選別する塾生。

掘削溝に敷き詰められたガラ。Ｅ塾生の早業が印象に残った。武蔵屋から持ってきたガラも全てここで使用した。不思議なリサイクルであった。
写真右：ガラの上から排水菅を設置する。今回の工事材料もほとんどはジョイフル本多である。全く何でもある店だ。

左：排水菅の上には一部、竹を被せた。水田の排水菅設置工事などでもこうした竹を入れるそうだ。この竹はもちろん吉岡家庭にある豊富な竹である。
右：8 月 2 日から武蔵屋では東京電機大学による武蔵屋改修工事が開始されていた。（筆者は今年は仕事で参加できず。）一階の一部が改修され、今様のリビングルームになっていたものをもとの姿に復元すべく撤去工事を行なったものだ。この工事は 8 月末も実施される。滋賀先生が大活躍である。

平成 18 年 7 月 16 日　今年も利根川へコスモスの種を播きました。

今年も利根川河川敷へコスモスを播きました。秋が楽しみです。

平成 18 年 7 月 2 日（日）　塾生一同で蔵の再生で活性化を図っている土浦市へまちなみ再生研修に行ってきました。午前 8 時 15 分、一同は木下駅南口を小型バスで出発した。今回は塾生 13 名、吉岡まちかど博物館等 4 まちかど博物館館長、印西市中心市街地活性化推進室職員 2 名、他に市民アカデミーの方々、塾生のご主人、奥さんも参加し、総勢 28 名、補助席も満員の盛況ぶりを見せた。市民、行政、蔵所有者等三位一体となった今年の研修は塾のM編集長の企画で実現したもので流石である。また、今年は昨年と異なり、塾の誇る？「貸間氏娘？！」をバスの前後に分離したので割合静かであり、大きな前進であった。午後 7 時無事木下につくことができた。最後にお世話になった上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館、土浦市都市計画課、土浦市ボランテイアガイド協会、土浦第一高校旧本館活用委員会の関係者の方々には大変お世話になりました。この塲を借りて厚くお礼申し上げます。

午前中は上高津考古学博物館を訪問した。ここは縄文後期から晩期を中心とする貝塚が中心となっている。土浦市には考古学を主とするこの博物館とそれ以降の歴史を展示する市立博物館の二館からなっている。人口は今回の合併で１４万人、印西市の二倍強である。印西市には木下河岸の誇るべき歴史があるが博物館が無かった。しかし今は、市民が再生した吉岡まちかど博物館がある。写真右：車椅子で参加した０塾生と伊藤会長。Ｏ塾生は市会議員でもあり、不自由な体にもかかわらず今回の視察研修に参加した。木下駅圏の活性化に向け、今後の活躍に期待できそうである。	 上高津博物館前で	 車椅子で参加したＯ塾生と車を押す伊藤会長。
今回の研修には休日をおして、土浦市の都市計画課長さんと係長さんに出席いただき、まちかど蔵（野村）で市の「歴史的商家建築物改修事業」と「歴史の小径整備事業」を報告いただいた。資料によるとまちかど蔵（大徳　延べ 585 ㎡）は平成 9 年から 12 年度事業で約 184 百万円、314 千円／㎡、財源は一般財源約 46 百円、起債 1 億、県補助 35 百万。野村（227 ㎡）は平成 13 年度から 14 年度事業。国のまちづくり総合支援事業を活用し、総額約 130 百万円（572 千円／㎡）、国費 42 百万円、一般財源９０百万円であった。それにしても巨額である。しかし、これにより市民はまちに愛着と誇りを取り戻し、飲食店や瀬戸物屋はかなり売上げを伸ばしているそうである。ここも今は電線が縦横に走り、せっかくの再生空間を台無しにしているがこれも時間の問題で解決されるであろう。	 土浦市都市計画課との意見交換会（まちかど蔵野村内で）	 再生経過報告を聞く塾生
鶴田さんからは蔵再生の道のりを講演していただいた。土浦の蔵再生事業はこの人無くして出来なかった。行政とのやりとり、市民間での軋轢、解体のへ不安等々、それらを見事に乗越え、今でも最前線で活躍中である。印象に残るのは「当時の市長が蔵の保存再生に人一倍熱心だった」である。氏は土浦の人で、予科練の歴史にもも詳しく、野村の二階は土浦の予科練博物館になっていた。軍事ファンには必見である。まちづくりには熱い人がいる。市民、行政そしてコンサルタントに。	 講演中の鶴田氏。左は今回の企画者松本副会長	 ボランテイア協会の案内を受ける塾生
まちかど蔵（野村）江戸末期から明治初期の建物。砂糖を商う。レンガ蔵は明治 25 年のものだそうだ。市内には他にもこうした赤レンガ蔵を見ることができた。ここは喫茶店になっており、二階天井まで大きな吹き抜け空間になっており、素晴らしいの一語につきる。まちかど蔵（大徳）江戸末期の建物。呉服商。印西にはこれに相当する規模のものは残念ながらない。それほど土浦の財力はあったといえる。近江八景を描いた二階の窓上の彫り物が印象的	 まちかど蔵（野村）	 まちかど蔵（野村）

であった。一階が土産物売り場になっており、筆者はレンコンサブレ、醤油を買う。ただ、土浦の歴史等の本がないのが残念であった。野村、大徳並びの店蔵。矢口家（県指定文化財）は酒屋でついつい買いたくなる店であった。

土浦蔵再生事業は上記に見るように行政指導できているようで、都市計画課がその中心におり、景観、小径整備事業を行なってきた。運営は鶴田さんがいる観光協会が行い、運営費は市からのものである。都市計画課の人が言っていたが蔵再生へハード整備は一段落したとのことで今後は自発的保全等になるととのこと。財源と保存再生は密接な関係にある。市民力の活用が今後の課題と言っていた。しかし、行政がここまで力を入れたお陰で基本的なものが残った。印西市はこの点、お寒いかぎりである。印西市もこの4月から中心市街地整備室としてハード系をソフト系が統合された組織となった。早く木下・六軒地区で将来にわたり、保存を図るものを選別し、手をうたないと歴史も文化も感じられないペラペラのまちになることは明白である。木下河岸の歴史を伝えるまちなみ、歴史施設が必要だ。それは新しい箱物である必要は全くない。今も木下に残る蔵町屋を活用すればいいのである。土浦にまた新たな刺激を受けた次第である。

まちかど蔵（大徳）

まちかど蔵（野村）

矢口家（酒屋）

吾妻庵本店（蕎麦屋）

旧土浦中学校本館（現土浦一高）　ここは筆者が最も行きたかったところでもある。明治37年竣工の木造でゴシック調の美しい建物だ。設計は辰野金吾の教え子である駒杵勤治（1877～1919）。42歳で無くなったこの人物の作品は今は水戸商業旧本館、旧太田中学校講堂のみであるそうだ。写真右は校舎部分、その後ろに同窓会館等が見えるがこれらはこの本館に合わせてデザインが統一されており、美しい景観を形成している。ここは当時の県予算が100万円のところ6万円であったそうだ。意気込みが違う。大学を出ていきなりこのような作品を残す力量と幸せは現在では考えられない。そういえば琵琶湖疏水の設計者田辺朔郎も大学卒業後いきなり事業をまかされていた。

本館前で一同

校舎

写真左はコリント式の原型となったアカンサス（acanthus）の花と葉。筆者は現物を初めて見ました。筆者は利根川蒸気船交通史を研究し、そのため広く明治の歴史を学んでいるが建築史も其の一つであり、各地に今も残る近代建築は何ともいえない品位がある点が好きだ。印西にも小林に一軒ある。右は柱頭部分。いずれにせよこういった歴史的雰囲気の中で学ぶ土浦一高生は幸せだ。案内していただいた方もここの卒業生かつ教員だった人で話しぶりも本館への愛情がこもっており、大変判りやすかった。土浦へきたら是非ここへも足を伸ばしてほしい。

校舎周りのアカンサス

本館正面の柱飾（コリント式？）

平成18年6月30日（金）　今年も木下小6年生57名が吉岡まちかど博物館へ木下の歴史を学びにやってきました。

今年も生徒 57 名、先生二人が来館した。塾生と木下小児童との交流は平成 15 年冬から 5 年に及ぶ。定期行事になりつつあるのは嬉しいかぎりである。木下小の子供達を見るたびにここ吉岡まちかど博物館を再生してよかったと思う、充実した一時である。

床下の蜆を見る児童

庭で学習する児童

二階は重厚な柱空間、そして棟札、民俗関係資料をみることができる。筆者は当日参加してないので雰囲気はわからないが子供達が木下の歴史の原点を現地で学ぶことは大変意義があることだ。地域の歴史を知ることにより醸成される愛着と誇りはまちづくりの原点である。今年も秋の児童たちとの交流が楽しみである。右は大貫塾生の作品である。柔らかいタッチでいとも簡単に書いているように見える氏の能力には何時も敬服している。段々減る木下の蔵、町屋を描いてもらい後世に残したいと思う次第である。

二階で半纏を着た

塾生に学ぶ児童

大貫塾生描く

吉岡まちかど博物館全景

平成 18 年 5 月 28 日（日）　房総のムラ　昔のまちなみ探検隊が木下を再訪していただきました。

昨年に引続き、房総のムラの「昔の町並み探検隊（木下）の一行、19 名の市民が雨の中、木下を訪れ、吉岡、武蔵屋、瀧田の各まちかど博物館を見学しました。これに対し、印西市の教育委員会、いんざいふるさと案内人協会そして木下まち育て塾生が木下・六軒の魅力を語り、交流を深めました。

写真左上は吉岡まちかど博物館で、右は瀧田まちかど博物館での探検隊一行。下左はご当主の挨拶を受ける一行。右は重厚な瀧田まちかど博物館の扉入口。中に木下まち育て塾が新たに作成したハッピを着ているご当主が見える。両館ともご当主自ら来館者を出迎えていただきました。ありがとうございます。このように蔵所有者の方の積極的な姿勢に何時も木下まち育て塾生は励まされている。市役所、市民団体の協働が見られた。

木下では最近、古い町屋が壊された。いとも簡単に。無力感を感じた瞬間であった。木下まち育て塾を結成後、既にこれで二件、蔵二件、町屋一件が消えた。町の宝が消えた。

平成 18 年 5 月 14 日（日）　武蔵屋まちかど博物館整備準備作業が始まる。

武蔵屋まちかど博物館は木下市街地の中央に位置する活性化及び景観形成上も重要な町屋である。本日二階を武蔵屋ご夫妻、塾生で活用に向けた整備準備作業を開始した。二年前、平成 16 年 5 月実施した吉岡家土蔵（現吉岡まちかど博物館）での作業を思い出した。帰宅後、鼻の中から真っ黒なものが次々にでてきたことも全く同様であった（笑い）。また、新たな動きがここ木下の中心市街地で始まった。ここは明治期、旅籠屋であり、一般民家と異なり、階段の幅も広い。これはすれ違えるスペースを確保したものである。	 整備作業準備に汗を流す塾生	 木下駅武蔵楼と書かれた踏み台裏
平成 18 年 5 月 6 日（土）定期開館。いんざいふるさと案内人協会による木下巡りの一行約 30 人ほか多数の市民の来館がありました。		
天気晴朗なれど波高しの５月５日、この日は印西の川開きだった。NPO の「いんざい水の郷ネットワーク」がついに佐原を参考に船を定期的に走らせ、市民と交流を図るとするものである。以前から市民祭で実施していたが、ついにこの日が来たと思う。関係者の努力を称えたい。夏からは本格的な周遊船（佐原と同程度）を手賀沼まで走らせる計画がある。この壮図の成功を期待して止まない。木下まち育て塾もこれに連携し、吉岡まちかど博物館の定期開館を第一土曜日にした。詳しくは印西市商工会 0476－42－2750、あるいは事務局の 0476 - 42-6660 へ。	 中央公民館北側の乗船場	 川巡りを楽しむ市民
5 月 6 日（土）午前 10 時、いんざいふるさと案内人協会主催の「木下巡り」が行われ、市民約３０名が来館されました。塾もｗ塾生お手製の半纏を着て出迎えました。1 年前とは内外とも一段と整備されたことを実感できる。今年も多くの市民をここ吉岡まちかど博物館は迎えるだろう。二年前誰がこのような素晴らしく美しい歴史的空間の出現を予測できたであろうか。この土蔵は今年は 115 周年を迎えた。もう一世紀は市民のため働いて欲しい。	 塾印が入った半纏	 参加したした市民達
今年も本格的な活動が開始された。この日は緑陰での定例会となった。なんと爽やかなことであろう。蔵前の紅葉の新緑に映えた吉岡まちかど博物館は一段と美しい。定例会も捗り、補修工事、市民講座、研修会の日程等が決まった。今年も多くの市民に来館して欲しい。定例会後は庭に多く生える竹ノ子堀を行い、春を実感した。この竹林も来月には藪蚊だらけで快適には程遠くなる。	 緑陰での定例会	 掘り出した竹ノ子
５月６日　二見屋まちかど博物館記念樹の碑を見学		

5月6日、或る市民が来館し、ブログ（北総ぶらり日記）を見せていただいた。ここに何と二見屋まちかど博物館開館記念碑が掲載されていた。塾生でもある二見屋ご当主は木下周辺の三箇所に開館記念碑を建立され、記念樹も併せて植樹されていた。まちかど博物館運動を行なっているものとしてこんなに嬉しいことはない。記念碑のある山頂からは利根川が一望できる。二見屋まちかど博物館に幸あれ！	正面「二見屋まちかど博物館記念樹」	左側にはご当主と奥様の名前が見える。